

2019 年度スポーツ庁委託事業

神奈川県障害者スポーツ推進プロジェクト

「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」成果報告書

2020(令和2)年3月
神奈川県
スポーツ局スポーツ課

本報告書は、スポーツ庁の委託事業として、神奈川県が実施した2019年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業）」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等にはスポーツ庁の承認手続きが必要です。

目次

1	地域が有する課題の状況.....	1
2	事業実施の目的、基本的事項.....	1
	(1) 実施体制.....	1
	(2) 検討会（実行委員会）委員一覧.....	2
3	実施日程.....	2
4	事業内容.....	2
	(1) 神奈川リハビリテーション病院について.....	2
	(2) 事業概要.....	2
	(3) 施設等の職員向け全体会.....	3
	(4) アドバイザー派遣.....	7
	1 発達支援室 kodomo 鶴見西口	児童発達支援、放課後等デイサービス 9
	2 放課後等デイサービスらぶあ淵野辺	放課後等デイサービス 11
	3 就労継続支援B型事業所しらゆり	就労継続支援B型 13
	4 第二やまびこ工房	生活介護、自立訓練（生活訓練） 15
	5 ハッピーキッズスペース	放課後等デイサービス、児童発達支援 16
	6 みんなと横浜吉野町	放課後等デイサービス 17
	7 ぷちっこ茅ヶ崎	放課後等デイサービス 17
	8 愛名やまゆり園	施設入所支援、生活介護、短期入所 18
	9 社会福祉法人育桜福祉会あかしあ園	生活介護 20
	10 県立えびな支援学校	特別支援学校 21
	11 県立津久井養護学校	特別支援学校 23
	12 アシスタンススクールつくしんぼ	児童発達支援、放課後等デイサービス 25
	13 県立湘南養護学校	特別支援学校 27
	14 県立相模原中央支援学校	特別支援学校 30
	(5) 施設等への取組支援.....	32
	1 放課後等デイサービスらぶあ淵野辺	放課後等デイサービス 33
	2 放課後等デイサービスらぶあ相模原	放課後等デイサービス 33
	3 障害者地域活動ホームふれあいの家	生活介護 35
	4 放課後等デイサービス サイン	放課後等デイサービス 37
	5 放課後等デイサービス ふいーる	放課後等デイサービス 37
5	今後の展望等.....	41
	参考資料.....	42
	(資料1) 「かながわパラスポーツ宣言」	
	(資料2) 「ともに生きる社会かながわ憲章」	

1 地域が有する課題の状況

本県では、2015(H27)年1月に「かながわパラスポーツ推進宣言(資料1)」を發表するとともに、「神奈川県スポーツ推進条例」(2017(H29)年3月施行)において、第3条「基本理念」に、障がい者のスポーツの推進について規定するとともに基本的施策として、第6条「かながわパラスポーツの普及」、第11条「障害者のスポーツの推進」を規定したほか、神奈川県スポーツ推進計画「エンジョイ・スポーツ!かながわプラン」(2017(H29)年3月策定)においては、9本の施策の柱の一つとして「障がい者スポーツの推進」を新たに位置付け、

- ・ 県障害者スポーツ大会等の開催や全国障害者スポーツ大会への派遣
- ・ 県内各地での「かながわパラスポーツフェスタ」の開催や市町村等が実施するパラスポーツ体験会への支援
- ・ 障がい者スポーツを支える人材の育成・活用

等に取り組んでいる。

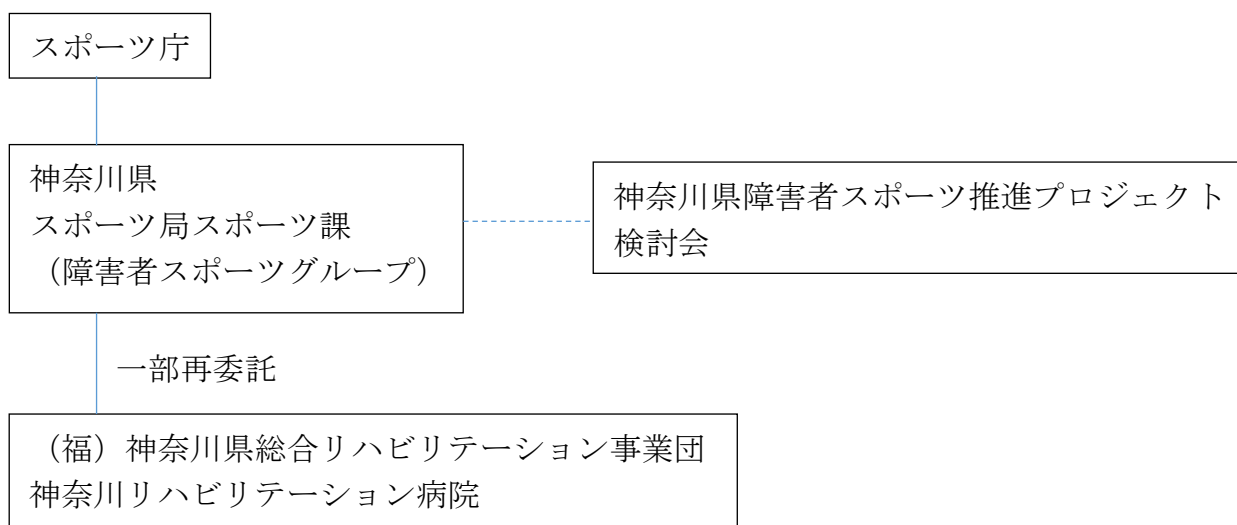
また、「ともに生きる社会かながわ憲章(資料2)」に基づく取組の推進が求められている中、障がい者スポーツの取組は、当該取組の実現への大きな役割を担っている。

障がい者スポーツの推進には、障がい者福祉施設・医療リハビリ施設等の障がい者が日常的に利用する施設等における取組も重要になるが、これまで当該施設等を対象とした取組は行っていない現状がある。

2 事業実施の目的、基本的事項

スポーツ庁「障害者スポーツ推進プロジェクト」を活用し、障がい者の継続的なスポーツの実施促進に向けて、障がい者スポーツの振興体制の強化、身近な場所でスポーツを実施できる環境の整備等を図るとともに、「かながわパラスポーツ」を県内各地で身近な取組として実践し浸透させていくことを目的とする。

(1) 実施体制



(2) 検討会（実行委員会）委員一覧

	区分	団体名	役職
1	学識経験者	神奈川県リハビリテーション病院	病院長
2	関係団体	(公社)神奈川県理学療法士会	副会長
3		(一社)神奈川県作業療法士会	副会長
4		(公財)神奈川県身体障害者連合会	次長
5		神奈川県知的障害施設団体連合会	障害者支援施設 部会長
6		(特非)神奈川県精神障害者地域生活支援団体連合会	常任理事
7		神奈川県障がい者スポーツ指導者協議会	会長
8		(特非)神奈川県レクリエーション協会	理事長
9		行政	神奈川県スポーツ局スポーツ課
10	機関	神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課	課長

3 実施日程（実績）

実施 時期	計画事項				備 考
	実行委員会	研修会	アドバイザー 派遣	取組支援	
7月	第1回検討会				
8月					公募準備
9月		※事業者公募（プロポーザル方式）			
10月					
11月		全体会 (2回)			
12月			アドバイザー派遣 (13施設、計18回)	取組支援 (3施設)	
1月					
2月	第2回検討会				

4 事業内容（事業実施者：（福）神奈川県総合リハビリテーション事業団神奈川県リハビリテーション病院）

(1) 神奈川県リハビリテーション病院（以下、「神奈川県リハビリ」という）について

神奈川県リハビリでは、1973(S48)年の設立以来、障がいのある方に対するリハビリテーションの一環として、理学療法、作業療法その他、社会参加や機能回復、体力の維持向上を目的とした体育指導を行っている。

これまで神奈川県リハビリが培ってきた体育指導にかかるノウハウ・経験を活かし、地域の施設等に対し障がい者スポーツの普及推進に取り組んだ。

(2) 事業概要

施設等の職員向けの集合研修となる「全体会」(ステップ1)の開催、施設へ当院スタッフを派遣し施設の抱える課題やニーズに応じた支援を行う「アドバイザーの派遣」(ステップ2)、施設が行うイベント開催を支援する「施設等における取組支援(ステップ3)」の3段階で構成

されており、実施の概要は以下のとおりである。

ア 「施設等の職員向け全体会」の実施（ステップ1）

第1回

日 時：2019(R1)年11月12日 9：30～12：30

会 場：ウィリング横浜 901 会議室

参加者数：25名

第2回

日 時：2019(R1)年11月23日 9：30～12：30

会 場：神奈川リハビリテーション病院 3階研修室 体育館

参加者数：15名

○合計参加人数 40名 31施設

イ 「アドバイザーの派遣」の実施（ステップ2）

派遣施設数 13施設

延べ派遣回数 18回

ウ 「施設等における取組支援」の実施（ステップ3）

取組支援数 3施設

延べ支援回数 3回

(3) 施設等の職員向け全体会

障がいがある方の継続的な運動の参加促進を図るため、病院や施設、学校、企業などのスタッフの方々を対象に、実技指導を含めた研修会を開催した。障がい者スポーツのきっかけづくり、実施のためのノウハウの提供、継続的な取り組みができるよう環境整備のアドバイスを行った。

ア 実施概要

(7) 開催日、参加人数等

第1回

2019(R1)年11月12日 9：30～12：30

（会場：ウィリング横浜 901 会議室）

申込31名、出席25名

第2回

2019(R1)年11月23日 9：30～12：30

（会場：神奈川リハビリテーション病院 3階研修室及び体育館）

申込16名、出席15名

○合計申込人数 47名 34施設

○合計参加人数 40名 31施設

(イ) 研修講師及びスタッフ

体育指導員、理学療法士、作業療法士、研究員、社会福祉士

イ 講義概要

(7) 趣旨説明

スポーツ基本計画を踏まえた障害者スポーツ推進プロジェクトについて、国、県の取り組みと、神奈川リハビリテーション病院が受託した事業についての説明を行った。

(イ) 障がいのある方のスポーツ（座学）

スライドを利用し、障がいのある人のスポーツの紹介と、運動における効果、実践に向けた支援方法等を説明した。また、スポーツレクリエーションを楽し

むために、支援者側が障がい特性を知りそれに配慮することの重要性や利用者が自己肯定感や仲間をつくれるように、障がいに応じた道具やルールの工夫をすることで出来ることが広がるという事例を含めて紹介した。



(ウ) 誰もが楽しめるスポーツの体験（実技）

体育館やグラウンドを借りないといけないような本格的なスポーツではなく、自分たちの施設の中でもできる、日常生活の中で体を動かす工夫の紹介、室内でできるレクリエーション性のある運動、発達障がいや知的障がいのある方に効果的な環境の作り方について、体育指導員と理学療法士が各種用具の紹介とともに実技指導を行なった。

a 導入と準備運動

知的障がい、発達障がいの施設からの申込者が多いことを踏まえ、障がい特性を考慮したストレッチや軽い運動の指導法、環境の構造化の方法、用具の工夫などを紹介した。



b 障がい者スポーツの体験

○ 卓球バレーの体験

- ・ 1チーム複数人で、2チームに分かれ、卓球のボールを転がして相手チームに返すゲーム。バレーの名前が付いているように、相手チームに返すまでに最大3回まで自チームが打てることが基本ルール。
- ・ 卓球台ではなく、会議室のテーブル等でもできるため、多くの施設内で実施が可能。
- ・ 運動の難易度を下げるために、3次元（空間にボールを飛ばす）から2次元（台の上を転がす）にし、運動に制限がある方も参加しやすいゲームにする。
- ・ ラケットは普通の卓球のラケットでも良いが、障がいの特性に合わせて工夫すれば、ラップの芯、ダンボールなどで作成できる。
- ・ ボールは視覚障がい者用の音の出るものを使用するとよい。このボ

- ールは跳ねが少なく、遠くへ飛ばずにゆっくり動くため利用しやすい。
- 参加者の障がい特性や性格を見てルールに工夫を加える。例えば、相手チームと協力しラリーを20回続けることを目標としたり、味方チームが全員触らないと相手に返せない条件をつけたりする。



○ フライングディスクの体験

- 障がい者スポーツとしての競技の紹介、的等の専用の用具が無くても、フラフープと支柱で代用するなど、手作り用具の工夫の紹介。
- 知的障がいや発達障がいの方向けに、順番が分かるように椅子やフープを活用して並ばせたり、投げる位置を視覚的にわかるように足の形のシートを置いたりすることで、言葉での指示が入りづらい方も理解しやすくする環境の作り方の紹介。
- 新聞2枚を使って手作りのフライングディスクを作成し、作る楽しさと自分が作ったもので運動ができる楽しさを体感した。



○ ボッチャの体験

- 基本的ルールと用具の紹介、用具を借りる手段の紹介。
- 障がいに応じて取り組みしやすいようにルールを簡略化し実施する変則ボッチャ・レクリエーションボッチャの紹介。例えば、コートも白ボール（ジャックボール）も使わずに、床に置いたシートを的とし、決められた位置からボールを投げシートに載れば得点とする。的となるシートを大きいものとする、より成功体験を高めることができる。

ウ 参加者の感想等

- 勉強になった。用具の準備にお金がかからないので貸し出し、安く手作りするなど道具のアイデアの共有ができてうれしい。参考になるグッズが沢山あった。
- 使用した道具を見て普段の活動のグッズのアイデアが沢山得られた。
- 工夫することで誰でも参加でき楽しむことができた。ルールも分かりやす

く取り入れたいものが多かった。参考になった。

- ・ 楽しかった。卓球の工夫が良かった。出来ることをしてもら意識であったが、出来るように工夫する、広がりを感じた。
 - ・ 道具の工夫、ゲームの工夫が良かった。今後取り入れたい。お金をかけず楽しみながら行う体づくり、リハビリという観点が良かった。
 - ・ 実技の内容で施設にあった方法で工夫して行いたい。施設内で試してみたいと思った、実際に体験でき工夫できそうなこともあり参考になった。
 - ・ いろいろな利用者に合わせた遊び方のヒントが得られた。
 - ・ 雨の日は公園で遊べないので、室内での対応を検討している。発達障害へのスポーツ支援について、これまでブランコを職員は押して手伝ってしまっていたが、自分で動かし楽しむことも必要と感じた。
 - ・ 施設内で活用できる実践的な研修ありがとうございました。
 - ・ 実技研修は参考になった。実技が楽しくできた。運動面での研修が見つからず、いろいろ参考になった。今後も身近にあるものでできるレクリエーション、実技などの講習に出たい。
 - ・ 参考になった。当施設の利用者に導入をどのように進めるか考えていきたい。
-
- ・ 足の動き、手の動きが悪い子のマッサージなどを知りたい。
 - ・ 体操を行うことについてお願いしたい。
 - ・ ダンスを行っていて、姿勢に注意しているが… 日常的に楽しみながら行える事を教えてほしい。
 - ・ きっかけ作り、近隣施設を使用したスポーツイベント等のアドバイスがほしい。
 - ・ 自分が求めている内容にズレあり 重度知的障害を伴う自閉症区分6に当たる方の体を動かす方法などの事例を知りたい。
 - ・ 運動会で取り入れてみたい。来年度来てもらえないか。
 - ・ アドバイザーの派遣が来年度実施されるなら活用したい。
 - ・ アドバイザー派遣の期間が短すぎる。

エ 総括

アンケートの結果、全体を通しての満足度は3.4（4点満点中）、今回得られるものがあつたとの回答は75%と全体的に高い評価が得られた。

今回の参加者は、知的障がい、発達障がいの施設が多かつた。成人に比べ、児童の施設が多く、利用者の対象にばらつきがあつた。

発達障がい、知的障がいの児童を対象とする施設が多かつたことから、レクリエーション目的の運動、遊びの延長にある運動へのニーズが高い傾向があつた。健康維持目的は、成人施設が多かつた第2回で回答数が多かつた。なお、競技スポーツへのニーズはわずかであつた。

参加者からは、自分たちの施設でどんなことができるのか教えて欲しい旨の記載があつたことから、支援の一つとして、利用者の障がいを踏まえてできる運動の提案が望まれる。自分たちの取り組みの評価や、一同に会して行う運動の指導方法など、既に取り組んでいる運動に対する支援方法へのアドバイスを求める声もあつた。

運動を阻害する要因として、放課後等デイサービスの施設では、職員の時間や余力よりも、道具・用具の問題と指導者の問題を挙げる施設が多かった。場所の問題を挙げる施設も半数近くあり、普段は公園を利用している、近所の階段を利用しているなどの記載もあり、雨天時の実施も含め室内でのレクリエーションの提案にニーズがあることがうかがえる。成人施設が多かった第2回では、全般的にきっかけがないことや、職員の余力も問題との回答が増えた。日常の介護や支援に割く時間が成人施設では増えているのが原因ではないかと考えられる。

今後の個別支援については、参加した方の70%近くが検討したいと回答している。ただし、ステップ2のアドバイザー派遣については、1月までの実施で調整が図れるが、ステップ3の施設内競技会等開催は施設で行うイベントに合わせて実施したいなど意向があり、来年度にやってもらいたいなど、事業とのアンマッチが見受けられた。今後検討すべき課題のひとつと考えられる。

(4) アドバイザー派遣

ア 概要

障がいの分野、年齢層の双方について幅広く支援の申し込みがあった。障がいの分野は、知的障がい、発達障がい、身体障がいとそれらの重複障がいの方を対象に、障がいの程度も重い方から比較的軽度の方までの支援が求められた。

年齢層は未就学児から70歳代までで、特別支援学校や放課後等デイサービスを利用する児童の年齢層から、特別支援学校卒業後の通所利用で比較的若い方が多い施設や入所を含めて中高年齢層が多い施設までの支援を行う機会が得られ、神奈川リハビリとしても障がい者のライフステージを運動機能面からアプローチし観察することができる貴重な機会となった。

放課後等デイサービスに対しては、住宅地にある教室スペースの限られた資源を利用してできるレクリエーション、用具の紹介と活用方法、運動プログラムの提案、発達障がいに起因する運動機能の改善方法（手の機能の発達なども含む）、運動を通しての社会性獲得へのアドバイスといった支援を行った。

特別支援学校については、体育の授業に対するアドバイスを外部機関の視点から求められた。個別の課題がある児童・生徒に対して、神奈川リハビリで行ってきた体育訓練のメニューを紹介するなどの情報提供を行った。身体障がいのある児童生徒については個別対応を行い、身体機能・運動能力の評価、有効と思われる姿勢や運動等の提案を行った。

いずれも、児童を対象にしている施設からは、発達障がいに伴う感覚統合に関する諸課題、特に運動の機能として、視覚、前庭感覚、固有受容覚の改善を促す運動についてのニーズが高かった。

成人を対象としている施設からは、特別支援学校卒業後に運動の機会が減少することで、体重が増加するという問題が共通して多く発生しており、施設側でも積極的に体を動かしたい意向が高く、それぞれの施設で工夫して様々な取り組みを行っていた。今回派遣の依頼があった施設は、障がいの特性から、全般的に集団でレクリエーションや運動を行う事が困難であることが多く、身体障がいと知的障がいの重複障がいのある方の個別対応が求められた。身体機能・運動機能の評価し、普段の生活の中でできる運動や姿勢の作り方などの提案などを行った。

また、作業の合間にできる体をほぐすための運動の提案や、雨天時と屋外散歩中の転倒リスク低減のため施設が保有する体育館でできる運動の提案が求め

られ、それぞれニーズに応じた運動プログラムを提供した。加齢に伴い、散歩中の転倒というリスクも施設の抱える課題の一つになっていた。

今回の事業開始前は、ボッチャやフライングディスクなどの障がい者スポーツの競技種目となるものを施設の状況に合わせて紹介し展開していくことを想定していたが、現実のニーズは、発達障がいのある児童の感覚統合に向けた運動のニーズが非常に高かった。

支援を受けた施設からは、大変参考になったので来年度も継続して実施して欲しいという要望が多数寄せられた。運動機能の改善につながる具体的な研修が少ないことや、身体に障がいがある方の個別の評価と運動へのアプローチについて相談できる機関が少ないということが背景にあると考えられる。

イ 派遣施設一覧

	施設名	施設種別	実施日	
1	発達支援室 kodomo 鶴見西口	児童発達支援、放課後等デイサービス	12月3日	12月10日
2	放課後等デイサービスらぶあ淵野辺	放課後等デイサービス	12月4日	12月12日
3	就労継続支援B型事業所しらゆり	就労継続支援B型	12月13日	1月10日
4	第二やまびこ工房	生活介護、自立訓練(生活訓練)	12月16日	
5	ハッピーキッズスペースみんと横浜吉野町	放課後等デイサービス、児童発達支援	12月17日	
6	ぶちっこ茅ヶ崎	放課後等デイサービス	12月18日	
7	愛名やまゆり園	施設入所支援、生活介護、短期入所	12月19日	1月21日
8	社会福祉法人育桜福祉会あかしあ園	生活介護	1月8日	
9	県立えびな支援学校	特別支援学校	1月15日	
10	県立津久井養護学校	特別支援学校	1月16日	
11	アシスタンススクールつくしんぼ	児童発達支援、放課後等デイサービス	1月17日	
12	県立湘南養護学校	特別支援学校	1月22日	1月30日
13	県立相模原中央支援学校	特別支援学校	1月24日	

派遣施設数 13 施設 延べ派遣回数 18 回

ウ 派遣職員職種別人数

職種	延べ人員
体育指導員	28 人
理学療法士	13 人
作業療法士	2 人
社会福祉士	18 人
リハビリテーションエンジニア	1 人
写真技師	1 人
合計	63 人

エ 派遣内容

1 発達支援室 kodomo 鶴見西口		児童発達支援、放課後等デイサービス	
派遣概要			
1 回目		2 回目	
2019(R1)年12月3日(火) 10:30~12:15		2019(R1)年12月10日(火) 10:00~12:00	
場所	鶴見西口教室内	場所	鶴見西口教室内
対象	施設職員4名	対象	同グループ施設職員19名
派遣内容		派遣内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・環境調査・ニーズヒアリング ・施設における支援方法の確認 ・運動指導、根拠を含めた支援方法の提示 ・施設の支援方法の評価 		<ul style="list-style-type: none"> ・同グループ施設職員に対し、用具の紹介とそれを利用した実技(簡単なレク) ・自助具の紹介と利用方法紹介 ・症状や発達に応じた体育指導員や作業療法士の観点から支援方法の紹介 	
アドバイザー	備考	アドバイザー	備考
石井 宏明	体育指導員	石井 宏明	体育指導員
高木 満	作業療法士	高木 満	作業療法士
前田 智行	社会福祉士	前田 智行	社会福祉士
施設の状況			
利用者の状況			
<ul style="list-style-type: none"> ・2歳から小学生まで(発達障がい(軽度)、自閉症)の利用者で、1枠4人~5人の療育を実施している。 ・勉強の時間や運動の時間のカリキュラムを用意し、運動は月に1回くらい実施。ツイスター、ボーリング、ゴム飛び、平均台、サーキットなどを実施している。 ・歩行、スキップ、縄跳び、体幹の弱さに課題を感じている。指示が入らない児童もいれば、入る児童もいる。対象は様々である。 			
施設の希望			
具体的なゲームや競技の実施ではなく、普段の支援の中でうまくできなかった時にどうすればいいのかヒントが欲しい。ケースごとにどういう対応をすればよりいいのか、どのようなアプローチがあるのか、アドバイスを求めたい。			
提案内容			
具体的な運動等の提案内容			
<p>普段の支援で困っている事例について聞きたいというニーズであったので、施設スタッフからの質問を受け回答する形とした。個別の利用者を直接見ていないので一般的な話として、バランス、筋力、感覚などの視点から、個々の利用者の事例に対しアドバイスをを行った。</p> <p>また、2回目は、別教室のスタッフも交え質疑にこたえとともに、体育用具を紹介し、使用方法や効果を説明するとともに、室内でできる運動の体験をしてもらった。</p>			
1 回目		2 回目	
<ul style="list-style-type: none"> ・発達障がいのある児童へのスキップ、縄跳び、ボール遊びのアプローチ方法 ・感覚統合の理論と運動のアプローチ、作業療法のアプローチ ・現在行っている支援(アプローチ方法)の評価 ・運動が苦手な児童への運動への参加方法 ・体幹や腕などの筋力の強化方法 ・運動量と効果について ・適切な体育用具(訓練用具)の紹介 		<p>○体育用具の紹介と実演</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バランススティック ・ドレミマット ・矢印の付いたフープ(ケンケンパをするのに矢印の付いた輪の利用法) ・足形(立ち位置の提示、足を置く位置、スタートラインなどの視覚的表示で活用) ・バルバレー <p>用具の活用方法の案を示した後、施設職員が利用者の状況を踏まえ、バランススティック</p>	

- ・発達障がいに伴う力の加減ができない児童へのアプローチ
- ・集団の活動と個へのアプローチ手法の違い
- ・達成感の持たせ方
- ・言語の遅れと運動の関連
- ・固有受容覚に働きかける運動

既に様々な運動を、きちんとした根拠のあるプログラムで実施し、評価をされており、この施設で取り組んでいる方向性に間違いはないと伝えた。

とドレミマットの組み合わせたゲーム(ドンじゃんけん)を行い、活動のヒントを得ていた。また、バルバレーについては、居室内でできるものか、利用者へ提供できるものかの評価をしてもらうため、実際にネットを張り職員に体験してもらい、今後の運営のヒントにもらった。

○生活用具の紹介 (OT用具)

- ・座位を安定させる椅子 (骨盤を立ち上げる椅子)
- ・自助具各種 (スプーンや鉛筆、箸の保持、机用のマット、自作する場合素材や作り方のヒントなど)

○質疑応答

- ・階段の上り下りが不安な児童へのアプローチ、足の運び方と高さの認識
- ・長縄跳び、ボール遊びの実施方法
- ・手が不器用な児童への対応、発達と協調運動
- ・鉛筆がうまく持てない、ハサミがうまく使えない児童へのアプローチ、自助具の紹介と手の発達について
- ・運動と発達、感覚統合、固有受容覚の発達により運動について

実施の様子など



ドレミマットの紹介



足形や矢印の輪での誘導例

2	放課後等デイサービス らぶあ淵野辺	放課後等デイサービス	
派遣概要			
1回目		2回目	
2019(R1)年12月4日(水) 10:30~12:00		2019(R1)年12月10日(火) 10:30~11:45	
場所	らぶあ淵野辺教室内	場所	らぶあ淵野辺教室内
対象	施設職員5名	対象	同グループ施設職員8名
アドバイザー	備考	アドバイザー	備考
石井 宏明	体育指導員	石井 宏明	体育指導員
丸谷 守保	理学療法士	丸谷 守保	理学療法士
前田 智行	社会福祉士	前田 智行	社会福祉士
派遣内容		派遣内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・施設調査 ・ヒアリング、ニーズ把握 ・室内でできるスポーツの提案 ・簡単なスポーツの体験(ボッチャ) 		<ul style="list-style-type: none"> ・系列教室職員を集め、室内でできるレクの紹介と体験 	
施設の状況			
利用者の状況			
<ul style="list-style-type: none"> ・対象は小1~高校3年生で、発達障がい、自閉症、ダウン症、身体障がいの利用者もいる。 ・障がいの程度は軽度が多く、支援級に通う人もいれば、手帳を持っていない人もいる。 			
施設の希望			
<ul style="list-style-type: none"> ・運動することに目的や根拠をつけたい。 ・普段、スタッフは4~5人で担当し、半分は屋外、半分は室内に分かれ支援しているが、雨天時、寒い日のカリキュラムに課題があり、室内でできる取組みを考えたい。 			
提案内容			
具体的な運動等の提案内容			
1回目		2回目	
<ul style="list-style-type: none"> ・環境設定の方法の提案及び運動で使える用具の紹介 ・環境設定として、足形、手形、フープなどを用いて待つ場所の目印を提案 ・室内でできる運動として、ボッチャ、バルバレーなどの紹介 ・スタッフでルールを簡略化したボッチャを実施し、利用者への適否を含め検討 ○個別の事例で困難に感じている項目についての質疑応答 ・自閉症の方に向いている種目とは ・ボールがうまくとれない(協調運動) ・できない場合に、運動のレベルを下げてルールを簡単にして取組みやすくする等の工夫 		<ul style="list-style-type: none"> ・バランススティック、足形、輪の紹介 ・以下の施設の利用者が参加可能かの判断し、施設内イベントの開催に向けて検討 ○ボッチャ ・障がいの程度に合わせてルールを簡単にしたボッチャ体験 ・ジャックボール(白ボール)を利用した本来のボッチャに近いルールでの体験 ○新聞紙で作るフライングディスク ・新聞を丸めるところからはじめ、ゴールもフラフープの利用などかできることを紹介 ○バルバレー ・専用の用具及び工夫した用具の紹介 	

実施の様子など



ヒアリング、質疑応答






マットを的にしたボッチャ

3	就労継続支援B型事業所 しらゆり	就労継続支援B型	
派遣概要			
1回目		2回目	
2019(R1)年12月13日(金) 14:50~16:00		2020(R2)年1月10日(金) 15:45~17:00	
場所	しらゆり施設内	場所	しらゆり施設内
対象	施設職員4名	対象	施設職員4名
アドバイザー	備考	アドバイザー	備考
丸谷 守保	理学療法士	丸谷 守保	理学療法士
鰻田 亜矢	体育指導員	鰻田 亜矢	体育指導員
前田 智行	社会福祉士	前田 智行	社会福祉士
派遣内容		派遣内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・ニーズ把握 ・利用者状況の確認、環境調査 ・ニーズに基づく提案 		<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム提供 ・実技指導、撮影(編集) 	
施設の状況			
利用者の状況			
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者は、20代前半から60代後半までの知的障がい(自閉症)、精神障がい、ダウン症 21名。 ・指示はある程度入り、ダンスサイズの映像を見て、20分間のかなり動きのある運動ができています。 			
施設の希望			
<ul style="list-style-type: none"> ・作業中、椅子に座り体をあまり動かさず働いているので、ゆっくりとした体をほぐすような体操をさせたい。 			
提案内容			
具体的な運動等の提案内容			
1回目		2回目	
<ul style="list-style-type: none"> ・作業スペース付近で安全にできるよう、椅子に座って行う運動と立って椅子の背もたれをつかんで行う運動をして、筋トレ、ストレッチを組み合わせた5分間の体操を提案 ・発達障がい(自閉症)の方が理解できるよう、映像をビデオで流して、視覚的に提示することを提案 ・自閉症の傾向がある方は、居場所をはっきりさせた方が安定するため、椅子をテレビの前に持ってくるなどの工夫を紹介 ・撮影機材が無いので、撮影及び編集を神奈川リハビリ研究部の協力で実施することを提案 		<ul style="list-style-type: none"> ・5分程度で11種類の運動を組み合わせたプログラムを作成し、提供 ・実技指導及び撮影を実施(画像データは持ち帰り、編集作業、音入れ、カウント入れなどを行い、施設へ映像データを後日提供) <p>愛名やまゆり園本体でも同様のニーズがあったことから、同じ法人内で利用してもらうことにした。</p>	

実施の様子など



動画撮影

4	第二やまびこ工房	生活介護、自立訓練（生活訓練）
派遣概要		
2019(R1)年12月16日（月）10：20～11：50		
場所	第二やまびこ工房内	
対象	施設利用者5名	
派遣内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・施設利用者の状況把握、環境把握、施設のニーズ把握 ・利用者の身体的障がいの状況の説明と運動の提案 ・運動や普段の姿勢のアドバイス 		
アドバイザー		備考
石井 宏明		体育指導員
丸谷 守保		理学療法士
前田 智行		社会福祉士
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・10代後半～50代までの重度知的障がいを伴う自閉症（区分5～6）で、競技レベルの実施は不可。 ・指示は通らない方がほとんどだが、一部、軽度の方でキャッチボールや足でボールを蹴ることが可能。 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・うまく身体を動かさせない、日常的な運動が難しい方でも、何か運動に結び付けることができないか相談をしたい。 ・特に、身体障がいを併せ持つ5名の利用者に対するアドバイスが欲しい。 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・身体障がいを併せ持つ方で希望のあった個々の施設利用者に対して、理学療法の立場から運動方法を提示 ・障がい部位の一般的説明、普段の姿勢保持へのアドバイスの実施 ・自閉症の方の集団的活動に向けた一般的な環境の設定手法と軽度の利用者への集団支援として、簡単なゲーム（新聞で作るフライングディスク）などの紹介 		
実施の様子など		
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <p style="text-align: right;">新聞紙で作る フライング ディスク</p>		


5	ハッピーキッズスペース みんと横浜吉野町	放課後等デイサービス、児童発達支援
派遣概要		
2019(R1)年12月17日(火) 10:25~11:50		
場所	みんと横浜吉野町内	
対象	施設職員2名	
派遣内容		
<ul style="list-style-type: none"> 施設ニーズの把握、環境把握 体育指導の方法 室内で実施できるレクリエーションの検討 		
アドバイザー		備考
石井 宏明	体育指導員	
谷村 勇輔	体育指導員	
藤縄 道子	理学療法士	
前田 智行	社会福祉士	
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> 未就学児から高校生までの自閉症、知的障がいなど 年齢、レベル別に4クラスに分けている 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> 跳び箱、縄跳び、鉄棒などの基本的運動の指導方法 自閉症や指示の入りにくい児童にもできる簡単な遊びやゲームの紹介 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<ul style="list-style-type: none"> 自閉症や知的障がいのある児童にもわかりやすい跳び箱などをうまく行えるようにするための動作の工夫 体の構造理論を踏まえ、運動の段階を追って取組み方を技術指導 保有している体育用具を使ったサーキットの組立てなどのアドバイス 各種用具の紹介を行い後に施設スタッフから希望のあった、ゲーム性・遊び性のあるバルバレーの体験 		
実施の様子など		



跳び箱の指導方法



サーキットのアドバイス

6	ぷちっこ茅ヶ崎	放課後等デイサービス
派遣概要		
2019(R1)年12月18日(水)14:40~17:05		
場所	ぷちっこ茅ヶ崎教室内	
対象	利用者2名	
派遣内容		
・各利用者(2名)を見て、運動能力の評価、運動の方法、姿勢の保持に向けて心がけることなどを指導		
アドバイザー		備考
石井 宏明		体育指導員
藤縄 道子		理学療法士
前田 智行		社会福祉士
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・小学生から中学生の発達障がい、知的障がい、身体障がい ・多くの利用者は活発に活動できる 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・うまく歩けない、手が不器用、身体が固い、関節疾患などの児童がいるが、今回は、身体的障がいのある2人に対し、身体的評価、運動の方法、療育方法の提案が欲しい。 ・みんなでできる運動を次回は実施してみたい。(特にフライングディスク) 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・教室の担当者との情報交換 ・教室内で児童の活動の様子を観察、活動の合間で依頼された児童の評価 ・身体障がいのある2名については、理学療法士の立場から、運動機能の評価、運動の提案、姿勢の保持を含めた療育の提案 ・フライングディスク、ボッチャ、バルバレー、卓球バレーなどの紹介 		
継続的にこうした運動機能に対する専門的支援を望んでいて、来年度も実施を希望。		
実施の様子など		
		
日常的に運動へ導く工夫(施設内の移動の際に壁の手形にタッチ)		

7	愛名やまゆり園	施設入所支援、生活介護、短期入所	
派遣概要			
1回目		2回目	
2019(R1)年12月19日(木) 9:30~11:30		2020(R2)年1月21日(火) 9:15~11:00	
場所	愛名やまゆり園体育館	場所	愛名やまゆり園体育館
対象	施設職員2名	対象	利用者27名、施設職員9名
派遣内容		派遣内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の障がい状況、普段のプログラム、施設環境の把握 ・施設ニーズ調査 ・体育プログラムの提案と情報交換 		<ul style="list-style-type: none"> ・利用者に対して体育館内で行える運動プログラムの実施 	
アドバイザー	備考	アドバイザー	備考
鰻田 亜矢	体育指導員	石井 宏明	体育指導員
丸谷 守保	理学療法士	鰻田 亜矢	体育指導員
前田 智行	社会福祉士	前田 智行	社会福祉士
施設の状況			
利用者の状況			
<ul style="list-style-type: none"> ・20代前半から70代の知的障がいあるいは身体障がいと知的障がいの重複障がいで、重度者がほとんどである。 ・自発性、活動性低く、指示は入らない方が多い。 ・高齢化しており、運動機能の維持のため散歩などの運動を継続したいが、難しい方が多くなった。 ・全体的には、散歩のニーズが高く、家族のニーズ、本人のニーズも高い。 ・個々の行動面が違うため、全員が同じことをすることは難易度が高い。 			
施設の希望			
散歩が難しくなってきた方に向け、雨天時など外出が困難な時にできる体育館を利用した散歩に代わる運動の提案			
提案内容			
具体的な運動等の提案内容			
1回目		2回目	
施設利用者の障がい状況の把握、施設が感じているニーズを把握し、体育館でできる散歩に代わる運動の提案とニーズの摺り合わせ <ul style="list-style-type: none"> ・音楽に合わせたインターバル歩行の紹介 ・ラジオ体操の実施提案と環境の作り方の提案 		体育館で行える利用者の実態に合った運動プログラムの提供と進行方法の実演 <ul style="list-style-type: none"> ・ラジオ体操 ・音楽に合わせたインターバル歩行 ・ボール回し ・ストレッチ・筋力トレーニングの体操(しらゆり体操) <p>普段は車いす移動が多い利用者も、今回のプログラムでは進んで歩くなど、利用者の反応も良かった。また、音源として音楽を用意する、体操の場合は動画で別に用意することで、施設職員がこういうことをしましょうと最初に説明するだけで、音楽や動画に反応して利用者が自然と動く事がわかり、施設スタッフは個別の利用者対応に集中でき、プログラムの運営としても非常にやりやすいとの評価を受けた。</p>	


実施の様子など



しらゆり体操



運動プログラムの実施

8	社会福祉法人育桜福祉会 あかしあ園	生活介護
派遣概要		
2020(R2)年1月8日(水) 9:50~11:30		
場所	あかしあ園内	
対象	利用者3名	
派遣内容		
・利用者の活動を観察し、運動や機能に関するアドバイス		
アドバイザー		備考
石井 宏明		体育指導員
藤縄 道子		理学療法士
前田 智行		社会福祉士
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・グループホームや自宅などからの通所で日中支援を実施している。 ・多くの利用者が知的障がいであるが、身体障がい、視覚障がいの他、重複障がいも数名受け入れている。 ・10代後半から70代までで平均年齢は40代前半 ・利用者の高齢化に伴いニーズも変化してきた。 ・運動は好きでない人が多いため、別の目的を持たせて、掃除しよう、ポストに郵便を出しに行こうなどと誘導し、体を動かす工夫をしている。 ・散歩は嫌だという人もいて、家族からは体を動かして欲しいというニーズが高い。 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・日々の日課の中でできる軽い運動とレクリエーション的な運動の提案 ・個別に身体機能を観察し、評価をして欲しい。普段の動きを見てもらい（ラジオ体操など）アドバイスをもらえるといい。 ・毎日の運動で身体機能を伸ばすヒントがもらえるといい。 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・身体機能に障がいがある利用者3名に対して、理学療法士による機能評価 ・体育指導員とともにできる運動や効果的な動作の提案 ・比較的体が動かせるグループのラジオ体操、スクワットの様子を確認し、追加できる運動として、椅子に座って後ろの時計を見るなど体をひねる動作を提案 ・既存の取組みである講師と行うヨガが効果的な運動であり、講師がいなくともできる回数を増やせるように動作（ポーズ）の視覚的な提示により実施する方法の提案 <p>ゲーム性のある運動は困難だが、運動機能の評価を行う事業は継続して来年も受たいとの希望があった。</p>		
実施の様子など		
		麻痺足の評価

9	県立えびな支援学校	特別支援学校
派遣概要		
2020(R2)年1月15日(水) 9:45~11:00		
場所	えびな支援学校体育館	
対象	児童・生徒29名、教員10名	
派遣内容		
・体育(サッカー)の授業において、必要な支援やアドバイスを実施		
アドバイザー		備考
石井 宏明		体育指導員
谷村 勇輔		体育指導員
丸谷 守保		理学療法士
辻村 和見		リハエンジニア
前田 智行		社会福祉士
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・小中高の身体障がいのある児童生徒 ・意思の表出が困難な人や身体を自分の意思で動かさない人から、車いすの自走や立位が可能な人までの様々な障がいの程度の人が在籍している。 		
施設の希望		
・車いすサッカー(電動、手動)と立位の可能な身体障がいの児童・生徒(小中高)の運動の様子を見てアドバイス		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・教員からの聞き取り後、支援する側(教員)と児童との位置や環境の設定、児童を介助する時に安定する方法などの情報提供 (理学療法のアプローチについては、学校に常駐する理学療法士の意見を参考にするべきであり、神奈川リハビリからのアドバイスは行っていない。) ・授業の評価方法(児童生徒の受け取り方)について問われたが、本人の達成感やできた喜びは表情に出ているため、そうした事で評価するとよいことや、実施内容についても十分にできていると伝えた。 <p>○車いすサッカーを行う環境についてのアドバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車いすサッカー用に取り付けた車椅子ガードとして、塩化ビニルのパイプを利用した手作りのものを用意していたが、バーの高さが少し高いためボールに乗り上げる、重量のある車いす同士がぶつかった時にバーがずれるなどの支障があった。普段利用している車いすに簡単に取り付けられるように塩化ビニル管を利用することはとても良い発想であるが、車いすのパイプと塩化ビニルを市販のアタッチメントで固定し、簡単に脱着できるようにするとより良い。また、バーの高さの調整を考えた方がよい旨を伝える。(今回が初めてのバーの設置であったようで、教員の工夫で今後さらに利用しやすいものが提供されると思われる) ・車いすに机が付いているタイプを利用している場合は、ボールが見えづらいので、透明の亚克力板などの台を利用すると、もっと生徒がボールを見ることができる。 		

・車いすのサッカーでは、ゴール前で車いすが集まり、シュートができない状況になっているので、ゴールネット前の一部には車いすが入らないようにルールを少し変えるなどの工夫により、よりシュートが生まれて達成感が出るスポーツになる。また、教員が車いすに乗って一人入ることで、もっとスムーズにボールを各生徒に回すことができ、ゲームがよりよく進行する可能性がある。

・もっと大きいボール（例えばバランスボール）を利用したサッカーにすることで、着座位置の高い車いす利用者にもボールが見えるようになる。（通常より二回りくらい大きいボールを使っていたが、さらに大きいボールでも良い。）

神奈川リハビリができる具体的提案は限定的であった。ボールを触った時の児童生徒の表出を観察するに十分な効果が得られていると評価でき、障がいに応じた教員の声掛け、介助の仕方、用具の工夫などの支援方法も素晴らしいものがあった。

実施の様子など



車いすサッカー

10	県立津久井養護学校	特別支援学校
派遣概要		
2020(R2)年1月16日(木) 9:20~12:30		
場所	津久井養護学校体育館	
対象	児童・生徒50名、教員3名	
派遣内容		
・体育の授業を見学し、児童生徒の障がいに応じた支援方法のアドバイスを実施		
アドバイザー		備考
鰻田 亜矢	体育指導員	
蒲原 知子	体育指導員	
藤縄 道子	理学療法士	
前田 智行	社会福祉士	
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・知的障がい、発達障がい(自閉症)、身体障がいのある小中高の児童生徒 ・中高等部44名・小学部6名 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・小学部については、体育の授業全体の流れについて(運動量、道具等の配置、活動について)、フープを使った活動のアイデアや支援方法、教員の動き(言葉かけ、動き等)のアドバイス ・中高等部には、知的障がい教育部門の生徒が毎日楽しく取り組める運動として、どんな運動が有効か教えてほしい。(特に体幹、腹筋) 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<p>○中高等部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な動きからかなり激しい複雑な動きまで取り入れていることを確認し、今のメニューで運動として申し分ない。 ・身体障がいのある生徒の参加、自閉の生徒の動作、生徒が模倣しやすい教員の立ち位置、体幹を鍛える運動、注意力を養う運動についての質疑応答 ・早い動きが多いため、ゆっくりの動きの組み合わせの検討の提案 ・体をひねる動きが少ないため、ボールを使って体をひねるなどの運動の提案 <p>○小学部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寝る、寝転ぶ、走る、しっかり止まるといった静と動の組み合わせが良く、運動量としては十分確保できている。 ・児童の運動時の立ち位置を示す足形の活用方法や、待機と順番の指示がわかりやすく理解できる座らせ方の工夫の提案 ・教員が介助する場面の役割分担(教員の動きを少なくする提案)や、説明時のホワイトボードの向きと児童の座らせ方の工夫をすることで、教員の動線や道具の出し入れの回数を減少させることの提案 ・ジャンプをさせる運動の際、運動の終わりのタイミングがわからないため、一回やると何かを積み上げて10回積めたら終わりにするなどの工夫の提案 ・より重度の児童の場合の運動の組み立て方法(例:3次元の動きを2次元にする)や、ゲーム性のあるものとして、1回1回の完結が目で見えて達成感が得られるもの(例:ストラックアウト)の提案 		

実施の様子など



教員の指示場面

11	アシスタンススクール つくしんぼ	児童発達支援、放課後等デイサービス
派遣概要		
2020(R2)年1月17日(金) 10:20~12:05		
場所	つくしんぼ教室内	
対象	施設職員5名	
派遣内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・運動の支援プログラム構築に向け環境調査、ニーズ聞き取り ・用具の使い方の提案、スタッフへの実践 		
アドバイザー		備考
鰻田 亜矢	体育指導員	
藤縄 道子	理学療法士	
前田 智行	社会福祉士	
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・未就学児から高校生までの発達障がい、知的障がい、身体障がい ・軽い障がいから重い障がいまで様々で、マンツーマンの対応やじっとしてられない利用者が多い。 ・身体障がいは、寝たきりの状態の児童から片手を持たば歩ける程度の児童までがいる。 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・導入しやすい運動としてトレーニング種目を中心に教えてほしい。 ・ルールのあるゲームは難しいが、待つことなどは覚えさせたい。 ・まずは身体を動かすことから始めて、階段の上り下り、歩容の改善などを希望。 ・今回初めて運動の要素を入れるため、まずは職員向けヒアリングと提案を望む。 ・筆圧の弱い児童、スキップができない児童、寝たきりの児童のケアや装具のついてくる児童の対応が課題。 ・縄跳び、体幹を鍛える運動、協調運動をさせたい。 ・親のニーズとして、運動への関心が高い。(体重のコントロールとして運動のニーズ) 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・持参した用具(バランススティック、縄跳び(エア縄跳び)、足型・手型、マット、ドレミマット、矢印フープ)と使い方の紹介及び、協調運動やバランス運動の改善に向け、その用具を使った跨ぎ動作やマット運動を組み合わせたサーキットの提案 ・持参した用具と同様の用具を施設内で保有していることがわかり、施設内の用具を活用してできる運動の紹介を行った。 ・用具を組み合わせ、けんけんば、ハイハイ、高這い、横向きで歩く、片足立ちなどから、さらにできる児童には、ジャンプ、くぐるなどの動作を組み合わせ、児童が楽しめる遊びの要素を織り交ぜたサーキットの作り方の提案 ・体の使い方や歩行の改善に向け、クッション性のあるブロックを利用した歩行訓練や跨ぎ動作の訓練の方法、ボール遊びで育むバランスや下半身の強化など、施設内でできる運動の提案 ・順番や待つことを理解しやすくするためのフープ等の利用方法や、立ち位置を示すための足形の利用などの紹介 		

実施の様子など



バランススティック等の用具と使用方法の紹介

12	県立湘南養護学校	特別支援学校	
派遣概要			
1回目		2回目	
2020(R2)年1月22日(水) 9:05~12:20		2020(R2)年1月30日(木) 9:40~11:15	
場所	湘南養護学校グラウンド、体育館、敷地周辺	場所	湘南養護学校グラウンド
対象	生徒65名、教員6名	対象	生徒13名、教員3名
派遣内容		派遣内容	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育の授業の観察 ・ 体育授業のプログラム等の見直し提案 ・ 個々の生徒の支援方法の提案 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育の授業(中学部)の観察 ・ 課題のある生徒へのアプローチ方法の意見交換 	
アドバイザー	備考	アドバイザー	備考
石井 宏明	体育指導員	石井 宏明	体育指導員
谷村 勇輔	体育指導員	谷村 勇輔	体育指導員
押切 優香	体育指導員	押切 優香	体育指導員
前田 智行	社会福祉士	前田 智行	社会福祉士
施設の状況			
利用者の状況			
・ 高等部1~3年生72名、中学部2~3年生18名で、知的障がい、発達障がいがある。			
施設の希望			
○ 高等部			
・ 体力づくりの見直しを考えていて、持久的な運動と動き作り、筋力トレーニング等を取入れたい。			
○ 中学部			
・ ゆっくりでも走り続けられる工夫や働きかけ			
・ 縄跳びの跳び方や跳ぶまでの過程での工夫			
提案内容			
具体的な運動等の提案内容			
1回目		2回目	
○ 高等部 体育館のグループ、グラウンドのグループ、土手を走るグループの運動の様子を確認後、教員との情報交換、質疑により以下を提案 ・ 授業の導入部分で使える、しゃがむ動作やストレッチの組み合わせの運動の提案 ・ 高這い・四つ這いの運動も手足の協調運動として良い。走ることが苦手な生徒は、姿勢の維持がしづらいことに原因がある場合があるため、体幹を鍛えるためにも高這いの運動は良い。		○ 高等部 教員と情報交換・質疑の実施し、以下を提案 ・ 発達障がいのある生徒たちが運動を始めるのに導入しやすいメニューの紹介 ・ ストレッチ、筋力トレーニングの組み合わせ、ヨガを応用したポーズなどの運動の紹介 ・ フラフープを利用した運動、ボールを使用した運動を紹介 ・ マットを引く運動は、固有受容覚の発達として、親指の力や、力の具合、関節を動かす具合の入力に良い。	

・準備体操後、いきなり全力で走るのではなく、インターバル走行などで徐々に上げていく方が感覚的に移行しやすい。走ることは、多くの情報が脳で処理されるので発達にも良い。

・足が上がらない生徒については、練習として手を握る感覚と足を上げる感覚がマッチする場合があります、手のひらを握る運動の練習をすると足が連動しやすい。

・ラジオ体操について、全部ができない生徒には、できる部分だけを取り出して行うなど、目標の設定を低くして、できることを増やしていくと良い。

・模倣が難しい生徒についての指導方法、体の柔軟性を高める運動の紹介、グラウンドで活用できる用具（例えばハードル）の活用、固有受容覚を高める運動などの情報提供

○ 中学部（2・3年）

グラウンドで行うラジオ体操、グラウンドで音楽をかけての持久走、レベル別の縄跳びの様子を確認後、教員との情報交換、質疑により以下を提案

・音楽がないと走れないという生徒について、筋肉の弱さが見られるが、運動についてはこのまま継続するのが良い。普段からグラウンドで走る時も、音楽以外のペースメーカーとして、例えば赤いキャップの人をペースメーカーとし、マラソン時もそのキャップの人を見て走るなどが考えられる。

・縄跳びについて、練習の方法（運動の分解、跳ぶ部分の導入方法）や縄跳びの練習用具の紹介

・基本的動きがわからない、体の使い方がわからない生徒は、両足で跳ぶ、つま先で跳ぶことができていないため、つま先の感覚を養うのに、かかとを空中に浮かせてつま先で縁石の上に立たせて、軽くジャンプさせるなどすると良い。足の指を使って立てるようにし、裸足や柔らかいものの上でバランスをとって歩くなども効果がある。

・動的ストレッチやボディーパーカッションにより柔軟性やバランス感覚を養える。

○ 中学部

中学部 13名の体育の授業の様子を確認後、教員との意見交換・質疑を行う。自閉症で最近他の生徒と集団行動がとれなくなったという生徒を中心に観察を依頼された。

・観察の結果、一部逸脱することはあっても、準備体操やダンスに参加する時があり、すべてを拒否しているようではなく、きっかけがわからないが、何かがあつて（誤学習）それが彼のパターンになってしまっていると思われる。

・病院の訓練と学校の教育では違うかもしれないという前提の上で、病院での発達障がいのある方へのスタンスを紹介（運動に参加ができない児童について、病院での訓練ではあまり無理に参加させようと強制させないで、はじめは皆と一緒にできなくてもいいからやらせてみて、本人がやってみようという動きを示したらその様子を見逃さず、本人がのれる時にうまく誘ってのせてみる。運動には楽しい部分、辛い部分があるが、嫌なのに強制させるとそれが強化されてしまうため、さらにやらなくなってしまふ。自分からやっていくという事で自発性につながる。）

・体の固い生徒に向けた柔軟体操と運動の導入部に利用できるストレッチの仕方や、手の協調運動に有効な運動、ダンスなどの模倣が苦手な生徒に対する指導方法、教員の立ち位置などについて提案

・発達障がいの人のゆっくりとした成長の仕方に合わせ、どの年齢層のところで体の動きの習得ができていないのか見極めて、段階に応じた運動を積み上げていけば変化につながるとアドバイス

教員からは、外部からの視点でアドバイスを受けたことで今後のかかわり方の発想の転換ができたとの意見があつた。

実施の様子など



教員との情報交換



グラウンドでの授業観察



教員への実技指導



体育用具の使用方法的紹介

13	県立相模原中央支援学校	特別支援学校
派遣概要		
2020(R2)年1月24日(金) 9:20~12:30		
場所	相模原中央支援学校教室、体育館	
対象	生徒8名、教員5名	
派遣内容		
<ul style="list-style-type: none"> ・高等部肢体不自由部門のクラスへのアドバイス ・筋緊張に対する理学療法 ・体育の授業の観察と振り返り 		
アドバイザー		備考
鰻田 亜矢	体育指導員	
蒲原 知子	体育指導員	
藤縄 道子	理学療法士	
前田 智行	社会福祉士	
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・肢体不自由部門のクラスは、四肢麻痺、対麻痺、片麻痺など、全介助の方が多い。 ・車いすの自走ができる生徒、電動車いす、介助用車いすの利用者、立位可など障がい の程度も様々である。 ・キャスターを上げたまま体育館を一周できるくらいの運動能力を持つ生徒もいる。 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・体ほぐしの運動、創作ダンス、ボッチャの授業を観察し、改善点の提案やアプローチの仕方を教えて欲しい。 		
提案内容		
具体的な運動等の提案内容		
<p>○体ほぐしの運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員から要望のあった筋緊張が高い4名の生徒に対し、リラックスさせるために有効な運動指導や体の姿勢の作り方などを教員にアドバイス ・車いすの頭の位置の設定などで緊張が和らぐ可能性があることから、生徒の担当PTとの調整していくことを提案 <p>○創作ダンス</p> <p>音楽を聴き、振り付けのパート決めまででダンスの創作に至らずに終了した。</p> <p>○インターバルとボッチャ(体育館)</p> <p>授業を観察し、授業終了後に担当教員に以下を提案</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャについて、上肢のコントロールが難しい生徒については、頭頸部でボッチャの投球をコントロールできるような器具(頭に着けるベルトとスティックなど)を提供できると良い。道具を工夫することで、できるようになれば本人の成功体験もより深まり、楽しめるものになる。 ・車いすを利用する方で、空間の感覚がつかみづらい人や左側無視のある方へ、パイロンなどを活用した車いす操作訓練の手法の提案 ・車いすの利用者で運動能力が高い生徒に対して、次の段階に向けての車いすの操作訓練の手法を提案 ・いろいろな競技の体験をさせてあげたいことから、スポーツ用車いすのレンタル、各種スポーツの体験会、スポーツ教室への参加、競技団体など地域資源の活用や連携について情報提供し、外出支援などに関する課題について情報交換 		

・例えば競技大会に出るなど、自分から進んで行動をすることは、本人の主体性の向上につながり、日常生活にも反映されていくものであり、他者との交流も生まれるため、スポーツの持つ役割は大きいとアドバイス

実施の様子など



ボッチャ

(5) 施設等への取組支援

ア 概要

放課後等デイサービスについては、児童に対してルールを簡単にしたボッチャ、フライングディスク（新聞紙で作るディスクやドッジビー）、バルバレー（風船バレー）を実施した。施設のイベントとして、学校が無い期間に体育館等を借りて実施した。比較的障がいの程度が軽い児童が多く、ゲーム性のある運動を楽しめる事ができた。

実施する種目については、ルールを簡単にし、取り組みやすく達成感が感じられるように工夫した。また、待つ場所、座る場所、投げる場所などについて、フープやクッション、足形を使って環境の構造化を行い、言語で指示が入りづらくとも視覚的に理解しやすいよう工夫した。他の人の競技を待っている間も飽きさせないよう応援するなどの役割を与え、ゲーム時間中を通して参加、集中できるようにした。

通所の施設では、パドルテニスを施設近隣の体育館を借りて実施した。ボランティア団体と協働で、主に身体に障がいのある方に対する指導方法のレクチャーを行うとともに、重度障がい者が運動する場合の環境の作り方の情報提供を行った。

実施後、施設側から来年度も継続してこうした支援を受けたいという要望があり、ニーズの高さと支援の方向性の確認ができた。

なお、施設等における取組支援（ステップ3）については、施設が行う来年度のイベントに向けて来て欲しいなど、ニーズと今回の事業実施期間とのアンマッチが見受けられた。

イ 派遣施設一覧

	施設名	施設種別	実施日
1	放課後等デイサービスらふあ淵野辺 放課後等デイサービスらふあ相模原	放課後等デイサービス	1月7日
2	障害者地域活動ホームふれあいの家	生活介護	1月14日
3	放課後等デイサービス サイン 放課後等デイサービス ふいーる	放課後等デイサービス	1月25日

ウ 派遣職員職種別人数

職種	延べ人員
体育指導員	9人
理学療法士	2人
社会福祉士	3人
派遣人数 計	14人

エ 派遣内容

1	放課後等デイサービスらぶあ淵野辺 放課後等デイサービスらぶあ相模原	放課後等デイサービス
派遣概要		
2020(R2)年1月7日(火) 13:30~16:00		
場所	相模原ギオンアリーナ 柔道場	
対象	利用者 21名	
派遣内容		
・市の体育施設を借り、簡単ボッチャ、ドッジビー、新聞紙で作るフライングディスク、バルバレーの体験		
講師		備考
石井 宏明		体育指導員
押切 優香		体育指導員
丸谷 守保		理学療法士
前田 智行		社会福祉士
施設の状況		
利用者の状況		
・小1~高校3年生の発達障がい、自閉症、ダウン症など(車いすの身体障がい1名)障がいの程度は軽度が多い。		
施設の希望		
・広い場所でのボッチャ、新聞紙で作るフライングディスク、バルバレーの実施を希望		
実施内容		
具体的な運動等の実施内容		
<p>2教室の利用者、スタッフ、エリアマネージャーを含め、体験会を相模原市体育館の柔道場を施設側が借りて開催した。</p> <p>講師の指示は概ね利用者にとおり、簡単なルールに対応できていた。一部、指示が入りづらい利用者もいたが、その都度、施設職員のフォローにより全体的な流れはうまくできた。身体機能から、運動ができないレベルの利用者もいたが、施設スタッフのマンツーマンの介助により、工夫して参加することができた。</p> <p>走り回ることができる身体状況の利用者が多かったことから、レクリエーションに参加して他者と楽しく身体を動かすことや、体の使い方の学習、社会性や自主性の育みの観点からゲームを展開した。</p> <p>○簡単ボッチャ 場所が柔道場であったため、赤い畳を利用してその枠の外から投げるという構造化をした。通常のボッチャで使用するジャックボール(白玉)は使わず、大きなシート状的にボールを載せられるかを競うようにルールを簡素化したボッチャを実施した。指示した位置からボールを投げることや、何度か投球することによる学習で力の強弱をつけられる、人の状況を見て学習できるという状況を確認できた。投げる順番というルールを守る事もでき、投げた後の得点となるボールと一緒に数えて得点を競うなど、最後まで集中して参加しゲームを楽しむことができた。身体機能に障がいがある利用者でも、本人の意思により投げる事ができ、参加することができた。</p> <p>○フライングディスク ドッジビーを利用し、投げることの練習から開始した。順番が守れない利用者もいたが、その都度、施設スタッフの声掛けにより支援が入っていた。 鈴のついたゴールの枠に興味を沸く利用者も多く、手で鈴を鳴らしにくるケースも多々見受けられた。発達障がいの児童に対し、音の刺激を伴うアイテムの有効性を認</p>		

識することができた。

新聞で作るフライングディスクについては、実際にその場で個々の利用者に制作してもらった。作る楽しさも経験してもらうことで、運動への参加意欲が沸く作業であった。

途中で参加しなくなった利用者がいたが、しばらく様子を見て再度誘いつつ、飛んできたディスクを拾い始めたのを機に、参加を促し再び輪に入ることができた。

○バルバレー

当初は通常のパレーのルールに基づき実施しようとしたが、対抗心が芽生えボールを続けて打つことができず、レクリエーションとして成立しなかったため、ルールを変更し、ワンバウンドまで良いこと、3回以上同チームで打って良いこととし、ラリーを相互のチームで協力して続けることを目的にした。何度か練習させたのち、まずは小さい目標をたて、5回連続でやることを促し、目標を達成したところで褒めるという事を繰り返した。徐々に目標を10回、20回と上げていくと、児童より次は30回、50回という声上がるようになり、本人の達成感を感じられるようになっていった。運動による満足感が得られる結果となり多くの利用者が楽しめた。

この競技でも参加したくないという児童もいたが、球拾いやボール出しなど自分の役割を見出し、参加することができた。

比較的軽い発達障がいの児童が中心であったが、事前の施設職員のニーズとの情報交換、ニーズ把握、実施日のきめ細かい施設職員のフォローにより障がいのレベルに合わせたレクリエーション、運動の提供ができたものと考えられる。

実施の様子など



フライングディスク



バルバレー

2	障害者地域活動ホームふれあいの家	生活介護
派遣概要		
2020(R2)年1月14日(火) 13:30~15:00		
場所	生麦地域センター体育館	
対象	利用者7名	
派遣内容		
・利用者が行うパドルテニスの指導		
	講師	備考
	石井 宏明	体育指導員
	押切 優香	体育指導員
	前田 智行	社会福祉士
施設の状況		
利用者の状況		
<ul style="list-style-type: none"> ・養護学校卒業後(18歳)~70代まで(比較的若い利用者が多い)の身体障がい及び知的障がい、発達障がい(自閉症)で、障がいの程度は割と重度である。 ・言語によるコミュニケーションが困難な方、電動車椅子利用者、関節可動域制限のある方が多い。 		
施設の希望		
<ul style="list-style-type: none"> ・パドルテニスを実施したい。今回は、直接支援と言うよりは支援者に指導方法のコツを教えて頂くというイメージでお願いしたい。参加者15名のうち身体障がいがある7名の方の指導方法を見てもらいたい。 		
実施内容		
具体的な運動等の実施内容		
<p>パドルテニス協会(2名)と協働して障がいに応じた運動の提案、実践を行った。(ラケット、ボールは協会が用意)</p> <p>テニスのゲームを行うことを目的とせず、支援者が投げるボールをラケットに当て、打ち返すことを行った。</p> <p>支援者と施設利用者の位置の作り方、本人にボールを認識させてから投げる工夫の仕方、腕の可動域が制限されている方が環境を用意することで参加できる工夫の仕方などを支援者にアドバイスした。</p> <p>なお、パドルテニスは、既に継続的に当該施設で実施しているものであり、実施の段取りは施設と協会で調整できていた。協会は健常者を対象にテニスを教えることはできるが障がいに応じた対応のノウハウが無い事、施設職員は障がいに応じた支援の知識はあるが、スポーツの面からのアプローチの方法のノウハウが少ないことから、施設利用者の運動を継続的かつ効果的に行うため、運動に関する専門的アプローチの方法のアドバイスが求められた。</p> <p>身体障がいの方を中心に、知的障がいを重複する方や自閉症の方を対象に、支援者と施設利用者の立位置の作り方や、障がいに合わせた環境をつくることで、重度の障がい者が運動に参加しやすくなる工夫を紹介した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを視覚的に注意できない利用者に対しては、支援者がボールを投げる前に声かけし、本人が支援者の手元のボールを認識したのを確認してからボールを投げるなどの対応を紹介 ・関節の稼働域制限がある場合、前から来るボールを打ち返すのは難易度が高いことから、ラケットを左右に振るのではなく、体の前面でラケットを握ってもらい、ラケットの直上の位置から直下にボールを落とし、落ちるボールに合わせて手首でラケットを振る方法もあることを紹介 		

- ・可動域の制限があり、本人が打ち返したい方向に打ち返せないケースに対しては、ボール出しをする支援者の立ち位置を正面から角度をつけた位置に変えることで、より打ちやすい環境になることを提案
- ・肩関節が動かず肘関節がわずかに動く利用者には、肘の高さで腕を支えられる台を置き、肘から先の腕と握ったラケットを台の上で滑らせ来たボールを打ち返すことで、重度障がいでも環境の工夫により運動に参加できる方法を紹介

自閉症の方で、テニスをする意志のない利用者もいたが、声かけしコミュニケーションをとって行く中で、自発的に球拾いを始めるなど、本人の役割が見出され参加につながるケースが見受けられた。必ずしも運動に参加するだけが参加ではないことを施設職員とも分かち合った。

肢体不自由の方も多く、残存機能をいかに持続させるか日々考えながら支援するよう心がけている中で、今回のアドバイザーとの交流や助言が、今後の活動のヒントとして活かしたいと施設職員から評価を得た。

実施の様子など



パドルテニス

3	放課後等デイサービス サイン 放課後等デイサービス ふいーる	放課後等デイサービス																		
派遣概要																				
2020(R2)年1月25日(土) 12:45~14:50																				
場所	茅ヶ崎市柳島記念会館																			
対象	利用者13名																			
派遣内容																				
・施設のイベントとして、ボッチャ、フライングディスク等の運動の機会を提供																				
講師		備考																		
石井 宏明		体育指導員																		
鰻田 亜矢		体育指導員																		
谷村 勇輔		体育指導員																		
蒲原 知子		体育指導員																		
藤縄 道子		理学療法士																		
前田 智行		社会福祉士																		
施設の状況																				
利用者の状況																				
・小学生から高校生(発達障がい、自閉、知的障がい)の13人が参加																				
施設の希望																				
<ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャ野球を点数などが視覚的にわかりやすくして実施したい。 ・新聞で作るフライングディスク(事前に作成してくる)を対戦形式等で実施したい。 																				
実施内容																				
具体的な運動等の実施内容																				
<ul style="list-style-type: none"> ・ボッチャ投球練習を兼ねた簡単ボッチャとボッチャ野球の実施 ・新聞紙で作成したフライングディスク、ドッジビーでのストラックアウト ・バルバレー <p>障がいのレベルに応じて、ルールを簡素化させ、結果がわかりやすく皆で楽しめるゲーム性のある運動を提示した。障がいの程度の幅、年齢層の幅もあるため、個別に調整ができるよう工夫をした。</p> <p>○環境の構造化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・色分けしたクッション、フープで座る位置の指示 ・足形により、立つ位置の指示 ・バランススティックを利用した、範囲の設定 投げる位置の視覚化 ・鈴の音など、聴覚の刺激の活用 ・点数などを視覚的に理解できるような工夫(チームの色の付いたマグネットと表組の利用) <p>(イメージ)</p> <table border="1"> <tr> <td>5</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>4</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>3</td> <td></td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>○</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>1</td> <td>○</td> <td>●</td> </tr> <tr> <td>チーム</td> <td>○</td> <td>●</td> </tr> </table>			5			4			3		●	2	○	●	1	○	●	チーム	○	●
5																				
4																				
3		●																		
2	○	●																		
1	○	●																		
チーム	○	●																		

施設側で用意をしていた2チーム分のビブスには、名前シールが貼ってあり、講師が名前を読み上げて指示を出すことができた。

○準備体操

- ・理学療法士による準備体操の実施

演者となるスタッフは対面となるため、左右逆の動きをすることで、障がいにより、言語での指示が難しい人にも、視覚的に模倣がしやすいような工夫を行った。

○ボッチャの実施

- ・投球の練習も含め、大きめのシートを的にして各チームが順番に投げ入れる簡単ボッチャを先に実施

やり方を説明した後、「1番目に投げたい人はいますか」などと促し、手を挙げさせ自主性を育んだ。中には自分から進んで出てこられない児童もいたが、施設職員が促すことで参加することができた。講師が、投球前に名前を呼ぶことで、本人がかげがえのない個人として大切にされているという自己肯定感が生まれるよう配慮した。

複数回行うことで、投げる力加減の理解ができる児童もいた。的に入ったという成功体験を得ることも、多くの児童が経験できた。点数を数えるときも、スタッフ側が全て数えるのではなく、一つひとつのボールを分かりやすく掲げ参加者と一緒に数えていくこととした。

- ・ボッチャ野球の実施

施設側の希望で取り入れたが、野球のルールを理解していない利用者が多く、言語による説明の上、実際にやりながらルールを理解してもらった。的となるシート(1塁打、2塁打、3塁打、ホームラン)はなるべく大きく、アウトが少なくなるように配慮し、多くの方が成功体験を積めるようにした。投球をする場所はホームベース上とし、足形を置いた。説明をせずとも視覚的な認知によってその上に立ち投げるという行動ができていた。1塁、2塁、3塁にベースを置き、進塁してもらおうという、投げること以外の参加も行った。スリーアウトのルールは使わず、勝敗は全員が1回ずつ投球して入った点数で競うこととした。

待ち時間があることから音の出る応援グッズ(複数で持てるように長い紐に複数の鈴をつけたもの、ペットボトルの中にビーズを入れ音の出るもの、おもちゃのタンバリン)を用意し、待っている間の参加者が飽きない工夫を行った。

点数は、表の形の中にチーム色のマグネットを置くことで、文字情報だけではない視覚的な情報も併せて示し、障がいのある方にもわかりやすい仕組みとした。2回戦を行ったところで終了とした。

○フライングディスクの実施

新聞で作るフライングディスクの希望があり実施した。当日の午前に各自が作成したディスクを持ち寄った。自分が作ったもので遊ぶ楽しさという面でも良かったと考えられる。

投げる位置に足形と細いバランススティックを用意し、視覚的に提示した。うまく投げられない利用者もいたため、投げる位置は変えず、フラフープ状の的を動かし、なるべく的に入るよう個人の状況を見て調節した。うまく投げられる利用者には的を遠くするなど難度を上げ、向上心と達成感が得られるように行った。

的は、フラフープ状の輪にネットを張り、さらに鈴を取り付けることで、ディスクが網に入ると成功という結果が見えやすくし、鈴の音の刺激が発生することで、わかりやすい構造とした。

ここでも順番に投げることとし、投げる前に名前を呼び自己肯定感を高める取り組みを行った。

対戦型にすると面白そうだという施設側の情報もあったことから、2チームで競い合うこととし、同じように表にマグネットで点数表示を行い、結果がわかりやすいようにした。

ストラックアウトの利用では、ドッジビーを利用した。容易に的が抜けるよう緩く枠と的を接合し成功体験と結果のわかりやすさが出るようにした。

失敗してもう一度やりたいと駄々をこねても、順番は守ることは徹底させ、社会で必要となるルールを守ることの意識づけを行った。

○バルバレーの実施

風船をサテンの布で包んだボールを座って打つバレーを行った。座る場所にチームカラーのクッションやフープを置き、畳6枚分を一つのコートとしてバランスステイックで枠を作った。3度で返すルールは適用せず、一人が連続して打ってもよいこととした。さらに、施設職員にも入ってもらい、うまく体を動かさない利用者の介助に入ってもらおうとともに、なるべくボールのラリーが続くよう配慮してもらった。全員がボールに触れるよう、何度かボールを回す練習をした後、まずは、相手を思いやってラリーを続ける事を目的とするバレーを実施した。多少のルールの逸脱は無視し（来たボール持ってもすぐに投げればOK、ワンバンドしてもすぐに打てばOKなど）、低めの目標値（10回程度のラリー）をまずは立て、達成できたことを喜び、さらに20回などと目標をあげて向上心を刺激した。途中で児童らから、高めの目標値を設定する声があがり（自主性の発揮）、全員一体となって協力してラリーを続けた（協調性の育成）。

参加者の年齢差と障がいの程度の差が大きいという事もあったので、体格の良い利用者の横に体の小さい利用者が入った場所では、大きな利用者が打ってしまったため、小さい利用者がボールに触れない場面もあったが、利用者同士の座る位置の工夫や、児童との間に施設職員が入るなどの工夫があれば、もっと良い効果が得られたと考えられる。

対戦形式でも実施し、点数をこれまでと同様に色付きマグネットで示した。

また、割れた時の音に恐怖を感じ、風船が怖いという利用者が部屋から出てしまう、自閉傾向のある方が部屋の隅にこもってしまうということもあったが、時間を置いて施設職員が寄り添うことで、再び参加するようになった。無理に参加させると体育・運動への拒否感が生まれることにつながる可能性もあることから、こうした支援も望ましいものと考えられる。

○片付けの実施

使用した用具などの片付けを利用者全員で行った。人と協調して作業を行い（協調性の向上）、自分で見て動く（自主性の向上）、片づける行為に対しお礼を言われ褒められることで人の役に立つことを実感し、自己肯定感の醸成につながった。

ゲーム性のある運動を多く取り入れ、比較的障がいの程度が重たい方も参加できるように工夫したことから、参加した利用者に集団で楽しんで体を動かすという良い経験ができたものと思われる。

実施の様子など



準備体操



環境の構造化



ボッチャ



フライングディスク



バルバレー

5 今後の展望等

現時点での事業全体の反省点は、今年度からの新事業ということで、第1回検討会開催や契約等に計画よりも時間がかかってしまい、派遣事業の調整・実施の期間が短くなってしまったことである。そのため、ステップ2・3の実施施設数が当初計画よりも減ってしまった。しかし、初めて実施する事業を2ヶ月間という短期間で、ステップ2が13施設延べ18回、ステップ3が3施設実施できたことは十分と言える。また、実施した施設からは、「とても参考になった」、「また来てほしい」などの声が多くあり、本事業に満足してもらえたようであった。

次年度は、今年度の反省を活かして早めのスケジュールで実施するとともに、広報にも力を入れ、より多くの県内施設に本事業を知ってもらい、参加してもらおう。また、適切な回数や実施方法などを考えて実施していく。なお、次年度はオリンピックパラリンピック競技会の準備状況により、理学療法士等の人材確保の目処が不透明なことも考慮し、計画していく必要がある。今回は、体育指導員が障がい者スポーツ指導員の資格を持っていたが、それ以外の障がい者スポーツ指導員も積極的に活用するなどの手段も含めて考えていかなければならない。

実施後は、2年間の実施結果を基に実践モデル集を作成し、県内施設に対して発信していくことで、障がい者が日常的にスポーツする環境づくりを進めていく。

○ 参考資料

- ・(資料1)「かながわパラスポーツ推進宣言」

～ パラリンピアンから学ぼう！ ～ 「かながわパラスポーツ推進宣言」

世界の舞台で活躍するパラリンピアンは、自分の運動機能を限界まで鍛えて、最大限の力を発揮できるよう創意工夫し、動く部分をもっと動かせるように努力しています。

誰しも、高齢者になれば、どこかの身体機能が衰えていきますので、自分の機能を使ってスポーツをしているパラリンピアンから学ぶノウハウはたくさんあります。

みんなでパラリンピアンから学び、年齢、障がいなどによって異なる一人ひとりの運動機能を活かして、すべての人がスポーツをすること、それを観ること、支えることは、とても大切なことです。

それは心身をより健康な状態に近づけ、「未病を改善する」ことにもつながります。

そこで、神奈川県ではパラスポーツを「障がいのある人がするスポーツ」という考え方から一歩進め、「すべての人が自分の運動機能を活かして同じように楽しみながらスポーツをする、観る、支えること＝『かながわパラスポーツ』」と捉え、3つの取組を推進します。

1 パラリンピアンから学びます

パラリンピアンが自身の運動機能の限界に挑む姿から、体を動かすノウハウや創意工夫、諦めない心、できるようになる喜びを学びます。

2 「かながわパラスポーツ」を実践します

年齢、障がいなどを越えてスポーツをする喜びや、仲間ができる楽しみを実感できるよう「かながわパラスポーツ」を実践します。

3 パラリンピック競技大会を盛り上げます

「かながわパラスポーツ」を実践することで、2020年に東京で開催されるパラリンピック競技大会を神奈川から盛り上げていきます。

2015年1月6日

神奈川県知事

黒岩 祐治

・(資料2)「ともに生きる社会かながわ憲章」

津久井やまゆり園事件 この悲しみを力に、 ともに生きる社会を実現します

平成28年7月26日、障害者支援施設である
県立「津久井やまゆり園」において、大変痛ましい事件が発生しました。
このような事件が二度と繰り返されないう、
私たちはこの悲しみを力に、断固とした決意をもって、
ともに生きる社会の実現をめざし、
ここに「ともに生きる社会かながわ憲章」を定めます。



ともに生きる社会

かながわ憲章

- 私たちは、あたたかい心をもって、
すべての人のいのちを大切にします
- 私たちは、誰もがその人らしく
暮らすことのできる地域社会を実現します
- 私たちは、障がい者の社会への参加を妨げる
あらゆる壁、いかなる偏見や差別も排除します
- 私たちは、この憲章の実現に向けて、
県民総ぐるみで取り組みます

平成28年10月14日 神奈川県

題字「ともに生きる」
ダウン症の女流書家 金澤翔子

本県の取り組みや金澤翔子さんの席上揮毫の動画などは、
こちらから [ともに生きる社会かながわ](#) 検索



この憲章は神奈川県と神奈川県議会が共同して策定したものです。

問合せ先 神奈川県福祉子どもみらい局福祉部共生社会推進課 電話 045-210-4961 FAX 045-210-8854



神奈川県